



井伏鱒二『黒い雨』論 : その自然に注目して

赤阪, 直子

(Citation)

国文学研究ノート, 35:25-36

(Issue Date)

2000-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012338>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012338>



井伏鱒二『黒い雨』論

—その自然に注目して—

赤阪直子

はじめに

井伏鱒二の郷里は広島県深安郡加茂村粟根（現福山市加茂町粟根）、福山市から約十五キロ北方の山間の村である。高台にある生家からは、幾重にも連なる山々と、その間を伸びる加茂川と往還、谷間に点在する家々と田畑がはるかに望める。

初期作品以来、井伏は、彼の郷里を思わせる自然を幾度も取り上げてきた。例えば、『谷間』（『芸芸都市』昭4・1（3））、『朽助のいる谷間』（『創作月間』昭4・3）、『丹下氏邸』（『改造』昭6・2）、『白毛』（『世界』昭23・9）、『遙拝隊長』（『展望』昭25・2）などは、まさしくその郷里を舞台にした作品で、山陽の風土をそのままに伝えるものである。また、直接郷里を登場させていなくても、山があり、川があり、田があり、そして素朴で善良な人々がいる、という風景を井伏は好んで描いてきた。そこには、郷里の自然が井伏文学の核としてあることがうかがえよう。

さて、『黒い雨』にもまた、そのような自然が描き込まれている。戦後四年と十ヵ月。重松夫婦と矢須子が住む小島

村は、広島市から四十何里東方、井伏の郷里加茂村粟根からは約八キロ、三方を山で囲まれた高原の村で、分水嶺になっている。物語では、被爆時の阿鼻叫喚の地獄絵が、「被爆日記」や「広島にて戦時下における食生活」、「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」及びその奥さんの記録などを清書することによって再現され、物語現在の小島村の昭和二十五年六月から八月五日までと、広島市の昭和二十八年八月五日から十五日までとが、交錯する形で進んでいく。

その中で、大江健三郎氏が、「まことに数多い動植物の名と博物誌的な正確さ」を指摘したように、自然が細かく写し出されていることは、注目に値する。例えば、鯉、泥鰌、銀杏、鳶、油蟬、蓮池のカイツブリ、フクラジの木、ケンボナシ、水引草、トクダミ、鱧、蓴菜等。

大江氏はさらに、『黒い雨』の自然について注目し、「『黒い雨』の描き出す原爆後の広島、その人間的悲慘は大きく激しい」とした上で、次のような示唆深い発言をしている。「『黒い雨』を読み終えた後の文学的浄化、癒しに触れたという思い（結びによってまずかもしだされるもの）が、原爆惨禍の表現についても穏やかなベールを一枚かぶせるよ

うな効果をはたしているのでは」。また、「書く苦しみと対抗するため、植物と生物の生命力への細やかな観察を行っている。生命のしるしを日常性の光のうちにあらわすもの提示に救われる。しかも、それらへの凝視に、ほっと息継ぎさせるためのものとは異なる、なにやら恐ろしい力が備わっているという思いを感じる」と言う。

『黒い雨』読後に感じるのは、他の被爆手記などに比べると「優しい」ということである。とはいえ、広島島の惨状やむごたらしく転がっている死体を直視する目は鋭い。むしろ、これほどむごいと感じさせるものはないのではと思えるくらい、出来事を容赦なく突き付けてくる。にもかかわらず、こういった印象を受けるのは、『黒い雨』が阿鼻叫喚の地獄絵だけを提示するのではなく、ところどころにふっと、見慣れた穏やかな自然を覗かせていることによるのだろう。広島島の惨状に心を突き上げられた時、穏やかな自然は一種の救いになる。

しかし一方で、大江氏が「なにやら恐ろしい力が備わっている」と感じ取ったように、その自然には単なる「救い」にとどまらない何かがある。『黒い雨』の中に丁寧に盛り込まれた「自然」には、どのような意味があるのか。自然について掘り下げてみることで、この作品について見えてくるものがあるに違いない。

1 原爆投下と自然

原爆投下後の広島では、自然は不気味な様相に変えられてしまっている。

引潮で川底が見え、窪地の水たまりのなかに、鱈のような魚が三四匹、腐乱した背骨をさらして沈んでいた。そこかしこに蟹が石崖から這い出したまま死んでいた。川岸の雑草はひどく徒長しているが、雀の稗草などのような禾本科の植物だけは対して目立たない。しかし音や光で植物が徒長するとは、どう考えても理解できないことである。

(傍点引用者) (201)

カタバミや烏の豌豆などの新芽が無闇に伸びて、自分を支えきれなくなつてだらりと垂れていた。植物も空襲の衝撃で細胞組織が変化するのだろうか。(中略) 光線とか音響とか熱の衝撃などで植物が徒長することは知らなかつた。今度の爆弾は植物や蠅などの成長を助長させ、人間の生命力には抑止の力を加えている。蠅や植物は猖獗を極めていた。昨日、この通りにある鱈鮓屋の焼跡では、裏庭の芭蕉が新芽を一尺五寸ぐらゐも伸びていた。(中略) ところが、今日は二尺の上も伸びている。一日に五寸以上も伸びているその実状には、農家に生れて樹木を見なれて来た僕も驚いた。

(傍点引用者) (202、203)

かつて『さざなみ軍記』(河出書房 昭13・4)の覚丹という人物は、源平争乱の最中に綴った「寿永記」冒頭に、「国破れて山河あり、城春にして草木青む、名も知れぬ花の

香も、盛者必衰の無常を説く」と記した。しかし、広島ではもはや自然さえも人によって破壊されてしまった。植物の異常な徒長など、自然の不気味な変調に重松は驚きの目を見張っている。

それまで、井伏は自然と共に生きる庶民の姿を繰返し描いてきたが、その自然は穏やかなばかりではなく、時に不気味な姿を見せることもあった。例えば、三宅島の噴火を扱った『御神火』（「こども朝日」昭18・6〜8）、大地震によつて島が人間もろとも水に飲み込まれてしまうという『侘助』（「改造」昭21・5）。そこでは自然は終末的な様相をもつて、人々に襲いかかる。

しかし、原爆は、井伏がこれまで描いてきた噴火や地震といった天変地異とは違う。例えば、『御神火』の避難民の一人は次のような手紙を書いている。

伊豆七島の神、三宅大明神（これ火の神）の神慮の
ほとんど窺はれて悪口はいはれませんが、あくまで御神火
です。ですから女たちは避難していく道すがら一生懸命
命に神に祈願してゐます。この祈り、信心によつて、
島民は救われることと思ひます。いまや「火の神」に
対し祈りと信心は生まれました……

噴火を「御神火」と呼ぶことから明かなように、山の弾ぜる大きな爆音と地鳴りの中で、人間は噴火に神の姿を見、畏れと祈りを捧げている。どんなに信じられない光景であろうと、それは昔から島の住民が繰返し経験してきた自然の荒々しい姿だった。人間は神に祈るほかなかつたが、

やがてまたもとの穏やかな自然に還っていくということも、経験上知っていたのである。

ところが、原爆はどうか。重松は、「今までに見たこともない一種異様な」原子雲に、「僕は体じゅう萎縮しているようであつた。腰を抜かしたのではないかと思つた」という。文中には「得体の知れない」という記述が何度も出てくる。原子雲も、黒い雨も、人々を灼いた熱線も、天守閣をそのままの形で吹き飛ばすほどの威力をもつた爆風も、黒い雨も、キノコ雲も、人がばたばたと死んでいくのも、植物の徒長も、理解を超えたものとして描かれている。それら原爆による諸現象は、それまで経験したことのないもの、自然界では起こり得ないものだったのである。「今までのこの宇宙のなかに、こんな怪しなものを湧き出させる権利を誰が持つているのだろうか（53）」という言葉が、原爆に対する重松の心をよく表わしているといえるだろう。「井伏鱒二は、原爆も『御神火』と同じ天変地異としてしか捕らえていない」という批判があるが、『黒い雨』の場合、神の領域であるはずの自然までも、人間が異常なものにしてしまったのだ。

天変地異は、あくまでも自然の姿の一つだった。穏やかな自然も天変地異も、どちらの姿もまっとうな自然であることに変わりはないのである。だが、原爆は、自然を自然ではない異常なものに変えてしまったのだ。

そうした広島の異常な光景の合間に、小島村の自然は、なつかしい安らぎを持って広がる。穏やかな自然に囲まれ

た小島村での生活は、一見平和そのものである。小説には、そこでの六月から八月にかけての行事が、丹念に記されている。それらの行事をいくつか抜き出してみよう。

虫供養は芒種の次の次の日にする行事である。百姓は野良仕事をすから地の底の虫を踏殺すので、お萩をつくって今は亡き虫類を供養する。この日は、近所の家から預かっているすべての品物をお返しするしきたりになっている。(74)

今月は芒種と虫供養がすんで、十一日にはお田植祭、十四日には旧の菖蒲の節句、十五日には河童祭、二十日には竹伐り祭と祭が続く。この貧相なくつものお祭は、昔の百姓たちが貧しいながらも生活を大事にしていたことの象徴のようなものである。重松は清書を続けながら、あの阿鼻叫喚の巷を思い出すにつけ、百姓たちのお祭りが貧弱であればあるほど、我れ人ともいとおしむべきものだという気持ちになっていた。

(106)

六月三十日は尾道港の住吉祭である。それに因んで、小島村では水害の起らぬよう祈願のため、住吉の神を勧請して灯籠ながしの祭をする。春夏秋冬の四季になぞらえて、蠟燭を点した白木細工の四台の手燭を谷川の淵に流すのである。それが、暗い水面でゆっくり廻っているほどいいと云われている。たとえば、秋とい

う字を書いた手燭が素早く淵から流れて行くと、秋には洪水の怖れがあるとされている。(132)

これらの行事をみるだけでも、小島村での生活が、農耕民族の、自然と深く結びついたそれであることがよく分かる。他にも、鯉の放養や、いたち除けの鮑のからをぶら下げた竹の棒や、笥の水をためて泥鰌やすっぽんをいけておく水甕など、細かな一つ一つが、この村の牧歌的な雰囲気をよく伝える。人々は自然のふところの中で生きているのである。

小島村の自然は安らぎを与えてくれる。だが同時に、そのまっとうな自然は、原爆による自然の変調と対峙し、かえって原爆の異常さを浮き彫りにする。このことについては、作者自身が、「虫供養とか、日常の平凡な行事を書かなければ戦争の浅ましさが出ないような気がして、対照するために書いたんだ。そんなこと、説明したらまずいけどな(笑)」と明かしているの、改めて言うまでもないだろう。ところで、それは「遥拝隊長」の手法に似てはいないだろうか。

「遥拝隊長」こと勇一の中ではまだ戦争が続いていて、彼は未だに軍人の時のままの行動を取っている。完全な狂人である。だが、戦争当時は誰も彼の行動を滑稽だとは思わなかったという。戦争の時代は今から見ると異常や狂気といった言葉で形容されるが、その時にはそれが「日常」だったのだ。その狂気は、平和な日常の中に置かれてこそ見えてくる。

『黒い雨』では、広島における生活も日常のリズムで描かれている。だがその「日常」は、どれほど小島村の日常と違うことだろう。そして、庶民にとつて、この穏やかな自然と平和な日常の方がどれほどいいものだろう。先にも引用したが、「貧相なくくつものお祭りは昔の百姓たちが貧しいながらも生活を大事にしていたことの象徴のようなものである。重松は清書を続けながら、あの阿鼻叫喚の巷を思い出すにつけ、百姓たちのお祭りが貧弱であればあるほど、我れ人ともに、いとおしむべきものだという気持ちになつていた」という言葉がそれを明確に言い表している。

2 死と自然

『川』（江川書房 昭7・10）、『多甚古村』（河出書房 昭14・7）には、様々な死が描かれている。川に落ちて死んだ子供、身投げした者、洪水で死んだ親子、恋愛のもつれから毒を飲んで死んだ女、首をつつて最期を急いだ婆さん。それらの死は、日々の生活の中に起こつた出来事の一つ一つとして淡々と描かれている。例えば、『川』では、流れていく川を視点として、流域の様々な人事と風景を紡いでいくというスタイルを取っており、死を描いても次の瞬間にはもう他の土地の他の出来事へと移ってしまう。また、『多甚古村』は「某氏の句に、『干渴にはさざら波、梅の村に入る』といふのがある。無論、まだ梅は咲かないが、やがて咲けば、その句は多甚古村の一部の景色にそっくりあ

てはまるだろう」という詞書のもと、巡査の日誌形式で村に起こつた事件を書き留めたものであるが、ここでもまた、死は他の出来事と同様、その日限りの事件でしかない。異常事といえる死でさえも、生活の二コマに過ぎないのだ。

『川』でも『多甚古村』でも、自然は人間にはお構いなしに存在する。人々の喜びも悲しみもいがみ合いも、全てを包み込んで川は流れていく。多甚古村の人間達にどんなドラマがあろうと、干渴にはさざら波が立ち、梅は咲き、散り、そしてまた花をつけるということを繰り返すだろう。人間の営みは自然の運行のうちにあつて、個々の生死など自然の中の一現象に過ぎないのである。

しかし、ふところとなる自然そのものもいびつに歪められてしまつた『黒い雨』では、その死も異様である。

この二人の男は、崩れた土塀のわきにある防火水槽を見つめて棒立ちになつていた。水槽には頭だけ白骨になつている人間がつかつて胸元から下を水に沈め、その水面には、べとつく油のような茶色の泡が溜つていた。人夫が思いきり悪そうにその水槽のそばにトタン板を近づけて行くと、白骨の頭が前向きにがくりと泡の中へ落ちた。さすがの田代さんも「ひどい、ひどい」と云つた。(176)

およそ日常の生活とはかけ離れた異常な死である。『黒い雨』でもまた、『川』『多甚古村』などと同じく死体を即物的に描いてはいる。だが、これまででは、死が哀感を漂わせたいはいてもことさら感情的な言葉を伴わなかつたのに対し、

『黒い雨』では、それらの死に対して井伏も言葉をもたさずを得ない。「戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済ませなければいい。いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい(170)」「死体は生前には人間である(171)」「わしらは、国家のない国に生まれたかったのう(172)」「これらは重松が「被爆日記」に書いた言葉ではあるが、そこには作者の声が重なっている。これまでも井伏は、『暹羅隊長』や『犠牲』(『世界』昭26・8)など、自らの戦争体験を反映させた作品で、一貫して戦争・軍人批判を打ち出してきた。『黒い雨』の底にも、それらと同様の憤りがうねっているが、時に表にあふれだしてくる叫びは今まで以上に読者の胸を打つ。

「新潮」が連載を依頼した昭和三九年は、ベトナム戦争が次第に拡大しつつあった時であった。折しも連載中の昭和四〇年二月にはアメリカが北爆を開始。井伏は『黒い雨』について後にこう言っている。

「異常な出来事です。僕は広島に疎開していても、こんなひどいものとは知らなかった。で、ほかの意味で真面目になったんだ。書く真面目でなく、事件に対して真面目になってきたんです」

「あれを書いている時は、ジョンソンさんがベトナムに出兵していたところです。ジョンソンさんは読んでくれないようですが、あれを(笑)。僕のものなんか全然、世の中に効果がないですね。アメリカ人なんか見向きもしないんじゃないですか。僕が書きながら真面目に

なったというのは、そういう意味なんです。アメリカの大統領や兵隊に読んでもらいたかった」

このような思いを知ると、感情を抑制することに徹してきた井伏でさえ、『黒い雨』では強い口調にならざるを得なかったこともうなずける。

「井伏の自然と死」と、「原爆投下後の自然と死」と。このような自然と死の関係は、実は先行する「かきつばた」(『中央公論』昭26・6)において既に見られるものである。

広島町の町が爆撃されて間もない頃、福山市近郊の知り合いの家に泊まった主人公の私は、池に異様なものを見る。それは仰向けになって浮かぶ人体で、脇には紫のカキツバタが一輪狂い咲いていた。広島工場で半分精神を病んだ上、原爆に遭い、福山に帰ってきたその日にまた空襲にあった娘だった。「あのカキツバタの花、何ごとにも脅かされて咲いたかね」と言う私に知人は、「さうか、この季節に、あんな花が咲いていたのか。ばかにしてる」と言う。その時ふと、私はある話の濃艶なカキツバタの花を思い出す。ある青年が、窓から池の見える二階に下宿していた。窓の下の池にはカキツバタが満開であった。その池を隔てたところに、若い指物師とその妹が住むみすほらしい家があった。妹は奉公に出ているうちに、父なし児を孕んで帰っているところだった。その続きを抜き出してみる。

ある朝、青年が何げなく窓から池を見ると、カキツバタの咲いてゐるそばに、指物師の妹が仰向けに浮かんでゐた。きれいな着物をきて、その着物の袖が金魚

の鱧のやうに水のなかに垂れさがつてゐた。指物師は妹の死体を見つけると、水の落ち口のところを大きくまたいで水面に向つて前こごみになった。伸ばした手が妹の死体に届いた。指物師は妹の片方の袖を水から引きあげて、それを妹の膨れたおなかの上に乗せた。同じやうに、もう一つの袖を妹のおなかの上に乗せ、行儀よく手を重ねたやうに袖を重ねた。さうしておいて、指物師は大急ぎで横丁の方へ出て行つた……

私がこんな話を木内君にきかせると、

「そのカキツバタの花と、あのカキツバタの花は雲泥の相違だ。時代からして違ふ。ばかばかしい花が咲いたもんだ」

と木内くんが云つた。

指物師の妹の側で咲き誇つていたカキツバタの花と、原爆に遇つた娘の側にたつた一輪狂い咲いていたカキツバタの花。そのカキツバタとあのカキツバタは雲泥の相違だという。この相違とは何なのか。「時代からして違ふ」とは。

妹の場合のカキツバタの花は四季の巡りに合つた花、つまりまっとうなカキツバタの花である。それらは、妹の事情などよそに、初夏の瑞々しい季節の中で今を盛りと咲き誇つている。濃紫色の花は、きれいな着物とともに、妖しいまでの美しさで妹の死を彩るが、花の方に異常さは微塵もない。むしろ、生き生きとしたカキツバタの花は、死という衝撃を和らげ、しんとした哀しみに純化させている。この死は「川」や「多甚古村」での死と同じ匂いを持つと

いえよう。一つの命が消えたことはなんとも言えない寂しさを与えるが、自然はこれまでと変わらず順当に運行している。彼女の死もまた、死という出来事の一つとして、自然の流れの中に組み込まれているのである。

だが狂咲のカキツバタの花は違う。戦争の時代の異常な雰囲気、原爆の異常さ、狂つてしまつた娘の心、娘の死。それらはひとつながりになつた異常であり、カキツバタさえもが狂つた花を咲かせて、その結びのなかに加わつていく。「こちこちにいじけた紫の花」は、異常さを和らげるどころか、ばかばかしい時代の全ての異常を強調するかのやうに不気味に浮かんではいるのである。

指物師の妹の死と、狂つた娘の死と、死であることに変わりはない。だが二つの死は全く違う。それは、まっとうなカキツバタの花と、狂咲のカキツバタの花とに象徴されているのである。

「黒い雨」では、小島村の自然をまっとうなカキツバタに、原爆による動植物の異常な様相を狂咲のカキツバタに、結びつけて考えることができるだろう。

3 「黒い雨」末尾の自然が示すもの

繰返しになるが、「川」も「多甚古村」も、庶民の様々なエピソードを重ねていったものだ。そこでは異常な出来事とさえも自然の流れの中にあつて、日々の雑多な出来事と同じく、次の場面ではもうすっかり遠くへ行つてしまつて

いる。

だが、原爆の異常さは流れ去ってはくれなかった。「黒い雨」では、原爆はいつまでも重松達を捕らえて離さない。小畠村での生活はもうあの広島とは何もかも違うにも関わらず、重松は原爆の後遺症に苦しまねばならず、矢須子は被爆したという噂のために縁付くことができない。それどころか、矢須子が突然発病してしまう。「はじめ僕は茶の間でそれを打ちあけられたとき、瞬間、茶の間そのものが消えて青空に大きなクラゲ雲が出たのを見た。はつきりそれを見た(233)黒い雨も、クラゲ雲も、原爆はどこまでも追ってきて、重松達の上へ覆いかぶさる。耳鳴りがし、脱毛し、痛々しく瘦せ細った矢須子。お尻には腫物が次から次へとでき、歯は折れ、腫れた歯茎からは絶えず血がにじみ出ている。そして、全身を襲う激痛。生身の人間である矢須子に、広島で見た無残な死体の映像が重なってくる。

ラスト近く、昭和二十年八月十五日の重大放送のシーンは印象的である。その時重松は、一人工場の裏庭に出て用水路を見ている。

流れは浅いが、ぼさなど一つもなくて、透き通った水だから清冽な感じである。

「こんな綺麗な流れが、ここにあったのか」

僕は気がついた。その流れのなかを鰻の子が行列をつくつていそいそと遡っている。無数の小さな鰻の子の群である。見ていて実にめざましい。メソッコという鰻の子よりまだ小さくて、僕の田舎でピリコまたは

タタンバリという体長三寸か四寸くらいの幼生である。

「やあ、のぼるのぼる。水の匂がするようだ」

後から後からひきつづき、数限りなくのぼつていた。

(315～316)

その清冽な水は、黒い雨やキノコ雲や防火水槽のなかの泡立つ茶色い水といった原爆による汚れを洗い流していくかのような印象を与える。また、全てが異常な世界にあつて、ピリコは生命への希望をもたらしにくれる。水とピリコとは、小畠村での自然と同じ、なつかしいまっとうな自然であつて、黒い雨や、キノコ雲、原爆によつてゆがめられた自然と、対峙するものである。それはあたかも戦争・原爆の異常な世界からもとの生活へと戻っていく始まりを示すかようであつた。それまで重層的に描かれてきた地獄の世界がやがて浄化されてゆくという、安堵と希望を与えるものだった。

しかし、八月十五日に受けたそういったイメージは、現実には虚しいものとなった。敗戦時のそんな安心もつかのま、今矢須子は原爆病に悶え苦しんでいる。浄化されていくかに見えた黒い雨は、今もなお彼女の体をじわじわとむしばんでいた。重松にも原爆病の症状が出ている。原爆はそんなに簡単に癒されることはなかったのだ。松本鶴雄氏は、「僕も食堂を出ると、もう一度鰻の子の遡上を見るために非常口から裏庭に出た。今度は慎重に足音を消して用水溝に近づいたが、鰻の子は一びきも見えないで透き通った水だけ流れていた」という八月一五日の締めくくりの部分

を、「ここで消え去ったのはピリコという鰻の子だけではないかろう。重松の目から、平和な生活の子兆としてのピリコの大群が束の間のごとくに消えたのだ。原爆の中を生きながらえて来た、(生命と生存)の象徴としてのピリコが消えたことよって、いつまでも再び重松は戦争と原爆の凶々しい貌の異常に捉えられるのである」と読んでいる。

そこで蓼沼正美氏は、水とピリコのシーンを「癒し」や「救い」とする解釈はお手軽だとし、被爆日記に書かれたこの風景を、矢須子が発病した今、なぜ清書したのか、ということに注目して次のように述べている。八月十五日の、またはこれを書いたときの重松には、原爆は「日常性への回復が可能な出来事として理解されていた、あるいはそう理解したかったのではないか」だから「眼前の自然を救済や癒し、新たな生命再生のメタファーとして表出させることになったのだろう」だが、矢須子の発病により、「それらのメタファーが原爆に対しては何の力にもなり得ないことを自覚しなければならなかった」それでもそのエクリチュールをそのまま清書したのは、「そうしたエクリチュールが原爆を書くことにおいては全くの虚構でしかないことを自己言及的に示して見せたのである」。

しかし、「救い」「癒し」や「生命再生」を表わすような自然は原爆に対して虚構だというような意識は、重松にはないだろう。というのは、なお重松は末尾部分で、「不吉な前兆とされる白い虹」ではなくて、「いいことが起こるしるしだという五彩の虹」が出たら矢須子の病気が治る、と望

みをかけているからである。

その翌日の午後、重松は孵化池の様子を見に行った。毛子の成長は上々で大きいほうの養魚池の浅くなっている片隅に蓴菜が植えてあった。たぶん庄吉さんが城山の弁天池から採って来て植えたのだろう。緑色に光る楕円状の葉片が水面に点々と浮かんでいるなかに、細い花梗をもたげて暗紫色の小さな花を咲かせていた。「今、もし、向うの山に虹が出たら奇跡が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ」どうせ叶わぬことと分かっていても、重松は向こうの山に目を移してそう占った。(320)

この場面についても、蓼沼氏は先の論理を進めて、次のように言う。「細い花梗をもたげた暗紫色の小さな花」には、「死や絶望といったイメージが、表現されている。語り手がそのような自然を選び取ってくるのは、矢須子の回復の可能性を意識してのことだが、逆にもうひとつの自然、(毛子の成長)や(緑色に光る)蓴菜の(葉片)の持つイメージが、原爆の問題に対しては全くの虚構でしかないことの虚しさをも語っている」。また、五彩の虹が出たら、と祈る時、「語り手は重松の内面にまで立ち入って(どうせ叶わぬこと)と、その不可能性の自覚を代弁するのである。この場合矢須子の病気の回復を祈ること、それはつまり原爆への祈りのわけだが、そのことの虚しさを重松はよく知っていた」と言う。

だが、蓴菜の暗紫色の花は死や絶望を表出するものだろ

うか。毛子や専業を描いたのは、そのイメージも原爆に對しては虚しいのだと語るためだろうか。「五彩の虹」に祈る重松にあるのは、祈ることなど虚しいのだという思いだけだろうか。

順調に育つ毛子。移植した専業も、緑色に葉を光らせ、暗紫色の小さな花をつけている。それらはまっとうな自然である。毛子も専業も、小さな命全てが自然のめぐりの中で順調に育ち、健気に花を咲かせている。それらのイメージは、決して「死」や「虚しさ」ではない、まぎれもなく「生」である。暗紫色の花については、湧田佑氏も、「かつて同じ色のかきつばたの咲く池に原爆で狂気した娘が飛び込んだ『かきつばた』を思い出し、矢須子の身の上の不安をそこはかとなく感じる」と書いている。だが、自然のめぐりの中で健やかに育っている暗紫色の小さな花には、あの狂咲のカキツバタを重ねることはできない。この暗紫色の花からカキツバタを連想するならば、それは死や異常とまっとうなカキツバタの方である。

八月十五日の清涼な水とピリコが与えた希望は、今から思うと虚しいものではあった。だが、それでもやはりそれらまっとうな自然の「生」は、黒い雨や、キノコ雲や、異常に繁殖した植物や、異常な死などと対立するものなのである。生や希望といったイメージを与える自然は虚構なのではなく、その生や希望というイメージが、対立する原爆の虚しさを引き立たせるといった方がよいのではないか。

もはや「ばかばかしい花」は咲いてはおらず、生のイメージはこんなにあふれているというのに、重松達被爆者は、いくら突破口を見つけようとかあがいても、黒い雨やキノコ雲などの一続きの輪からまっとうな自然の側に戻ることが出来ない。生のイメージが描かれれば描かれるほど、被爆者の哀しみが、沸き上がってくるのである。いわばこの場面は、原爆と対峙するまっとうな自然の提示という一連の作業の頂点として位置付けられるものである。

また、蓼沼氏は「重松は祈る虚しさを知っている」と言うが、それならば、「五彩の虹が出たら」という祈りなど、存在しなかつただろう。「五彩の虹が出たら奇跡が起こる」と占う重松の心には、「どうせ叶わぬことと分かっている」もしかしたら、というわずかな望みがあったはずである。その数日前に、重松は「岩田博の手記」によって、重傷患者にも奇跡的な回復がなきにしも非ずだということを知らされ、「何を措いても矢須子に気力を失わせてはいけない」「必ず生きるという自信を持たせなくてはいけない」と、改めて気持ち奮い立たせている。また、それを讀んだ矢須子の医師に微妙な表情が走り、「治療の参考になる」と言つたということもシゲ子から聞いている。矢須子の症状は、絶望的である。それでも、もしかしたら奇跡が起こるかもしれないという切ない望みが重松にはあつただろう。重松は、広島で、小島村で、いつでも「再起をはかり」「突破口を見つけよう」としてきた。そして、絶望的な状態に陥つてもなお、あきらめなどしていない。だからこそ余計

にその祈りは哀しい。『黒い雨』を貫いているのは、虚しいというあきらめではなく、なんとしてでも生きようとするずぶとい強さである。それがこの小説の最大の救いとなっている。

おわりに

井伏には、中島健蔵⁽¹⁰⁾氏が、「もはやみて居られぬといふところで突然目をそらし、さういふ人間たちを大きな懐かしい自然の中においてしまふのである」と的確に言い表したような傾向が、往々にしてあった。例えばその典型的なものとして『さざなみ軍記』が挙げられるだろう。「逃亡記」には、主人公が次第に追い詰められ、しかも手負いとなつてしまったことが記される。しかし、その後彼が平家と運命を共にしたのか、それとも落ち延びたのか、判然とさせないまま、作者は人間界のごたごたをふっと大自然に帰してしまう。後に残るのは、自然に対してあまりにも小さく、自然の流れの中で押し流されていくほかならない人間存在のじわりと哀しい余韻である。

『黒い雨』でもまた、矢須子の死までは言及しない。そして末尾の自然は、あがいてもあがいてもどうにもできない被爆者の哀しみを強調するものだった。しかし、『黒い雨』がそれまでと違うのは、末尾に祈りがあるということだ。重松の祈りには、それでもおし流されはしまいとするしぶとさがある。

注意すべきは、初出誌では八月一五日の日記で終えられ

ていたという事実である。つまり、先程引用した「これで、『被爆日記』の清書は完了した」以下の末尾部分は、刊行時に加筆されたものである。井伏がわざわざこの部分を書き加えたのは、原爆と自然の相対化の延長としての意味合いもある。しかしそのためだけならば、毛子や専業について記したところで、従来のように自然に目を向けて終わる形にしても別に構わなかったはずである。だが、井伏は重松の祈りをも書き加えた。それは、たとえ現実がどうにもならないものであったとしても「決してあきらめはしない」という重松の姿勢を印象付けて終わらずにはいられないからではないだろうか。そこに、これまでとは異なる井伏の姿勢をも感じ取ることができる。

(註)

(1) 「新潮」に、初め「姪の結婚」(昭40・1〜7)で、途中改題し、「黒い雨」(昭40・8〜昭41・9)として連載。昭和四一年改訂の上、新潮社より刊行。なお、引用は新潮文庫『黒い雨』(昭45・6)による。括弧内の数字はページ数。

(2) 大江健三郎「原爆後の博物誌」(『井伏鱒二自選全集』巻六月報 昭61・3)

(3) 大江健三郎「揺るがぬ『黒い雨』」(『新潮』平5・9)

(4) 徳永恂「井伏鱒二―黒・水中世界・自然のナルシズム」(『人間として』昭47・12初出『日本文学研究叢書』井伏鱒二・深沢七郎)所収)は、原子雲に向けられた

- 「おおい、ムクリコクリの雲、もう往んでくれえ。わしらは非戦闘員じゃあ」という被災者の金切り声は、「いかに無辜な民衆の切実な叫びを定着しているようにとも、それは『御神火』の被災者の『助けてくれえ』という叫び、『まだ地面の底は、勘弁してくれないんでしようか。もういいでしょうになあ』という吐息と、本質的には同一のものである。ここでは、原爆は、自然の天変地異としてしか捉えられていない」とし、また本稿第四章にも関わることだが、『黒い雨』末尾の自然を、原爆を浄化するものと見、『原爆が自然の異変として、御神火として捉えられる限り、原爆の瞬間にひらめいた超越的なもの、人間が対立すべき他者は、人間と自然との宥和のうちで、ほとほりをさまされ、水に流されていくことになろう」と不満を表した。また、井伏鱒二的自然について論じた井口時男「山川草木・天変地異」(『国文学解釈と鑑賞別冊 井伏鱒二の風貌と姿勢』平10・2)は、『黒い雨』は井伏鱒二の最大の天変地異小説であるとし、水の流れと小さな生き物の群に見入る姿は、巨大な天変地異によってこうむった惨禍も必ず山川草木の治癒力によって癒されるはずだという信念の姿勢でもあるだろうと述べている。
- (5) 小沢鱒二郎・井伏鱒二『黒い雨』のことインタビュール
井伏鱒二氏に聞く(『国語通信』筑摩書房 昭47・3)
涌田佑『黒い雨』の記録性と小説性(『私注・井伏鱒二』明治書院 昭53・5)によると、広島空襲から

二日後の福山空襲の時人々が怖れたのは、ここでも新型爆弾が落とされるのではということだったそうだ。「広島と福山の空襲が作者の胸の中で重ねられているということを考えに入れたほうが、より娘の錯乱が理解しやすい」

(7) 松本鶴雄『黒い雨』論―日常と異常のシーソーゲームの構造(『井伏鱒二論』冬樹社 昭53・5)

(8) 蓼沼正美『黒い雨』論―原爆を書くことの物語(『国語国文研究』平9・7)

(9) 蓼沼氏はそういう視点で論じたものとして、渡辺芳紀『黒い雨』(『現代国語研究シリーズ11』尚学図書 昭56・5)、猪野謙二『黒い雨』について(『国語通信』筑摩書房 昭47・3)、涌田佑(注)7、大江健三郎(注)3を挙げている。

(10) 中島健蔵『井伏鱒二』(『現代作家論』昭16・9)

(11) 寺横武夫『黒い雨』注解(『井伏鱒二研究』溪水社 昭59・7)は、この加筆部分について、「再現されてきた悪写実の地獄絵を、こうした『涼しい風』や『水の匂』がするよう自然や自然人のいる近景のなかへ解き放つことによって相対化するという、作者の方法意識が一つの象徴として」読み取れるとしている。

(あかさかなおこ／本学大学院修士課程)